

チームスポーツにおける対人関係の複雑さ： スポーツのもつ両義性からの考察

Complexity of Interpersonal Relationship in Team Sports:
Ambiguity in Sports

小林 洋平
Yohei KOBAYASHI

問題の所在

スポーツでは勝敗が明確であり、選手たちは常に競争にさらされ続けることになるため、勝利を引き寄せる活躍をした選手は「ヒーロー」として賞賛されるが、ある選手が致命的なミスを犯し、それが原因で負けてしまった場合は「戦犯」として蔑まれる。また、例え敗れたとしても孤軍奮闘した選手は称えられ、勝利したとしても重大なミスをした選手は批判されるという側面を持っている。そして、過度に蔑まれたり、批判されたりした選手は、自身の価値を貶められることになり、悩み苦しむ。筆者自身も過去のスポーツ体験から、過度に批判されたと感じ、悩み苦しんだ体験を持つ。それは、個人的な失敗であったが、この失敗を契機として、チームの仲間との関係性を思い悩むようになった。以下に、筆者自身のその体験を紹介する。

2004年8月にS県で開催された全国PK選手権大会に、私は高校のサッカー部時代から共にサッカーを続けていた仲間たちと出場し優勝した。

いくつかのメディアが取材に来ていたことや大勢の観客がいたことから、私は勝ち進んでいくごとに、試合の注目度が高まっている

ように感じていた。特にベスト8になってからは、ゴール裏にメディア関係者がその様子を撮影しており、自分が「見られている」という意識が強くなった。そして、決勝戦である。私が決めれば優勝という場面で、順番が回ってきた。過去にも、他者から「見られている」と感じながらプレーを行ったことはあるが、蹴る度にカメラのフラッシュが光り、PKの成否がわかるごとに観衆からの歓声があがるという状況は、これまでの経験の中でも一際「見られている」という感覚が大きかった。私自身は、非常に緊張して、膝が震え、プレッシャーに押しつぶされそうになりながらもシュートした。ボールを蹴る瞬間、足を地面に引っ掛けてしまった。「やってしまった」と思うと同時に、力ないシュートが転がりキーパーにキャッチされた。私はPKを失敗した。「大丈夫、〇〇が止めてくれるって」と仲間から慰められたものの、私は、地面を蹴るといふ小学生でもしないようなミスをしたことが、酷く情けなく、仲間に対して申し訳なく思い、俯いていることしかできなかった。その後、サドンデスに突入したのであるが、自分の順番が回ってくる前に試合が終わってほしいと願っていた。そして、私に順番が回ってくる前に試合に勝利したため、情けないと感じつつも、優勝したという喜びを強く

感じることができた。

大会が終わってから1ヶ月程が過ぎた後に、サッカー専門誌の「PK戦に絶対勝とう！」という特集の中でPK大会の決勝戦の様子が解説付きで掲載された。その記事を読むと、私のキックだけがPKを失敗する時の悪い見本として解説されていた。私は、自分だけが取り上げられて解説されたことに、「自分は下手で、失敗する典型的な選手なのだ」と感じた。また、この記事を読んだ仲間からは、「やっば、ありえないキックだったもんな」、「あれは、こう書かれてもしょうがないって」と、どこか気を使ったようなことを言われたものの、「下手だから」と言われているような気がして、私がPKを蹴ると失敗するのだと思うようになった。同時に、きちんとPKを決めた「上手な」仲間に対して劣等感を感じ、自分自身が選手として対等に見られていないのではないかと疑うようになった。

この体験以来、私は試合形式においてPKを蹴る機会毎に、蹴ったボールがゴールの枠に飛ばないか、きちんとインパクトできずにキーパーに止められるか、いずれにしても必ず失敗するようになってしまった。PKを失敗する度に、仲間に対しての劣等感や、自分だけがなぜこのような思いをしなくてはならないのかと感じ、仲間から見捨てられるのではないかと不安になった。同時に、仲間たちと選手として対等でいたいという気持ちを抱くようになった。そして、現在もこのような葛藤を抱えながらプレーを続けているが、このような不安を仲間たちに打ち明け、共感して欲しいとはどうしても思えない。

以上の内容が、私の体験である。ここでは、PKを失敗したということを契機として仲間に対して複雑な感情を抱くようになったことが重要である。自分が重大なミスを犯す以前は、「仲間から見捨てられる」、「仲間と対等

でありたい」などといったことを、少しも考えたことがなく、仲間と自分の結びつきは強固であり、例えば自分が重大なミスを犯したとしても仲間たちは「きっと受け入れてくれる」と考えていたにも関わらずにである。

チームスポーツでは、チームメイトと団結、協調、連帯が強調され、苦しい状況の中でもお互いに支え合う関係を築くことができると一般的に考えられている。しかしながら、チームスポーツを含むスポーツでは、何よりも勝利が優先されるため、何らかの問題を抱え勝利に貢献できない選手は虐げられる傾向にあることも事実であろう。また、チームスポーツでは他者との関係を持った上で競技を行っていくため、個人の失敗であったとしても、それはチームの失敗でもあり、個人内の問題に収まらず、他者との関係の上で問題が生じる。そこには、チームスポーツにおける特殊な対人関係の構造が潜んでおり、それゆえに選手自身が困難を抱えた場合、それをより複雑なものにするのであろう。

本稿では、このチームスポーツにおける特殊な対人関係の構造を明確にすることを主題とし、今後、チームスポーツにおける困難を抱えた選手を支援する際の一助にしたいと考える。

スポーツにおける啓蒙的意義と勝利至上主義

チームスポーツにおける対人関係を複雑なものとしている一因にスポーツ自体が持つ特徴が考えられる。

1) スポーツにおける啓蒙的意義

スポーツを行うことは、逞しい体を作ったり、明るく礼儀正しい人間に育ったりと良いこととして一般的に認識されている。平成12年度に文部科学省によって策定されたスポーツ振興基本計画における総論では、「スポーツは、人生をより豊かにし、充実したものと

するとともに、人間の身体的・精神的な欲求にこたえる世界共通の人類の文化の一つである。心身の両面に影響を与える文化としてのスポーツは、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や個々人の心身の健全な発達に必要な不可欠なものであり、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことは、極めて大きな意義を有している」とされている。青少年に対しては、「青少年の心身の健全な発達を促すものであり、特に自己責任、克己心やフェアプレイの精神を培うものである。また、仲間や指導者との交流を通じて、青少年のコミュニケーション能力を育成し、豊かな心と他人に対する思いやりを育む。さらに、様々な要因による子どもたちの精神的なストレスの解消にもなり、多様な価値観を認め合う機会を与える」とされている。近代オリンピックを創始したクーベルダン伯爵のスポーツ論では、近代スポーツのもつ民主主義・平等・連帯・平和といった積極的な価値を、老若男女・人種・宗教・階級・国家の枠を超えて人々が享受することが可能であるとされている(早川, 1995)。

つまり、スポーツを行うことによって、様々な側面で恩恵があるのである。そして、久保(2009)は、スポーツが「社会」において、必要とされる行動や知識、すなわち「社会性」を育成するところにその意義が認められてきたと述べている。選手を含むスポーツに携わる者たちは、このスポーツにおける啓蒙的意義を意識しており、スポーツを行うことによって健全な精神と肉体を培うことができると期待しているのである。この啓蒙的意義を論拠として、様々な場面でスポーツが行われるようになっており、学校教育において、体育科目が必修となっていることや運動部活動が奨励されているのもそのためであろう。

また、スポーツ心理学の分野においても、スポーツの啓蒙的意義を根底に、ライフスキ

ル教育、人格形成、人間関係、ストレス軽減などを目指す様々な領域において、スポーツが有益な役割を果たすといった知見が多数報告されている(例えば, Gould and Carson, 2008; 洪倉ら, 2011など)。そして、この啓蒙的意義に対する科学的根拠を得るとともに、スポーツの有益性を積極的に主張しているのが現状である。

このように、スポーツには啓蒙的意義が存在し、スポーツは良いものであるという側面が強調される。青木(2003)は、高校生を対象にスポーツを価値のあるものと見なすのかどうかといったスポーツ観を調査しており、運動部所属群が非所属群、文化部所属群に比べてスポーツ観が高いこと、競技継続年数が長くなるにつれてスポーツ観が高くなることを報告している。つまり、スポーツを行い、それを長く続けていくほど、スポーツを価値のあるものとして考えるようになるのである。しかしながら、スポーツには良い側面だけではなく、否定的な側面も含まれていることは否定できない。

2) 勝利至上主義

競技志向の強いスポーツ活動で最も優先されているのは勝利することであり、過度な競争原理に支配されていることは疑いを入れない。そのため、上述したスポーツにおける啓蒙的意義とはかけ離れた出来事が少なからず生まれてくる。ドーピング等の違反を犯してでも、勝利しようとする者が後を絶たないことはその証左である。これは、例えばオリンピックのような国際大会でメダルを獲ることができれば、その後の生活が保障されるような国が存在したり、メジャーリーグのように優れた成績を残すことができれば、莫大な年俵を得ることができたりと、トップレベルの選手であれば、勝利するか敗北するかで、そ

の後の生活が大きく左右されることにも一因があると思われる。

競技成績が自分の人生を左右するとは限らない学生レベルの競技スポーツであっても、勝利を得るために、わざと反則を犯すことで得点機会を阻止することや正々堂々といった言葉とはかけ離れたプレーを行う選手が見受けられる。また、高校生年代において野球留学という言葉が存在するように、有能な選手を遠隔地から入学させることによって、好成績を残そうとする学校の存在はいまや常態化している。さらに、私生活に問題のある選手であっても、その選手の能力が高ければ、監督やコーチは勝利のためにはその選手を起用するであろうし、相手を委縮させようとする野次や挑発といった行為も選手同士のあいだでは、しばしば行われている。そして、勝利を求めるために、肉体を限界まで酷使するような厳しい練習が行われ、自分の限界を超えられるようにと指導者から叱咤激励が飛ぶことは日常茶飯事であり、それについていけない者には厳しい視線が向けられる。

つまり、競技スポーツにおいては、卑怯な振る舞いや狡い振る舞いを厳しく咎める一方で、パフォーマンスを向上させるという名目であれば、暴言や果ては体罰までもが、勝利という大儀の前ではある程度容認されるという風土が醸成されているのである。つまり、競技スポーツは究極のところ「勝つこと」「勝つため」が究極の目標となる勝利至上主義に貫かれているのであり、或る意味で、手段を問わず勝ったものが正義となるという考えが暗黙のうちに共有されている。

そして、スポーツでは、優劣が明確であり、勝者の陰には常に敗者が存在する。勝者は優越感、達成感、賞賛などを得ることができ、敗者は劣等感、喪失感に苛まれ、周りから非難を向けられる。誰しもが勝って自己の価値

を高めたいし、負けて自己の価値を貶めたくないと思っている。そのため、スポーツが上述したような啓蒙的な意義を掲げているにも関わらず、勝利するためにそれと逆行した面があることは否めない。もちろん、競技スポーツの持つ意義とその勝利至上主義は、常に矛盾しているというわけではない。実際、勝つために周囲からどれだけ厳しい言葉を浴びせられようとも「何くそ」という高い反骨心を持って練習に励んでいくことは、人間に継続的に努力することの大切さを教えるであろうし、「勝つ」ために様々な方策を試みることは、人間の向上心を高めることにつながるであろう。しかしながら、スポーツに携わる者たちは、このスポーツの世界を貫く自己矛盾性を自覚していないのではないのか。冒頭で述べた筆者の事例にもあるように、筆者自身がスポーツを共に行う仲間とは対等であり、お互いが助け合える関係にあると考えているにも関わらず、劣った選手であり勝利に貢献できないという烙印を押されたが故に劣等感に苛まれ、仲間との関係性に矛盾を感じるようになった。

おそらく、自身を取り巻くスポーツの世界が問題なく回っている場合には、自身は優れた選手や問題のない選手であり、勝利するために努力していると考えられるため、スポーツが根本に抱えている両義性は表面化しないのであろう。他方、選手自身が問題を抱えてしまった場合、勝利に貢献できず自身の価値が貶められ、何としてでも勝利することを求められる一方で、他者と協調・協同し、フェアプレイの精神を押し付けられるという矛盾を感じ、スポーツ自体が抱えている両義性が表面化してくるのだと考えられる。

競技スポーツ集団（チーム）における両義性

チームスポーツは、チームという集団を形

成した上で行われ、その中では自分以外の他の選手と関係を築きながら、練習を行ったり、試合を行ったりする。このため、チームスポーツの中で選手が形成する対人関係の基盤にはチームがあるのである。

競技スポーツにおけるチームがどのようなものなのかというと、大まかに試合に勝つという共通の目標を達成するために集まった選手で構成され、単なる仲良し集団というわけではない。そこには、個人間の関係として良好な関係を築けている選手もいれば、反目し合う選手もいる。それでも共通の目標を達成しようとする仲間であり、監督、コーチ、選手（選手によって要求される内容が異なる）、トレーナーなど各々の役割が組織化され、チームにおける規則の基に統制された集団である。選手に関して言えば、試合に出場できる人数は限られているため、同じチームの中で仲間でもあり競争相手でもある。また、チーム内での競争により、レギュラー、非レギュラーという能力の優劣によって選手間の序列が形成されるという側面も持つ。

このようなチームに属していることによって、競技活動を行えるのであり、競技を行うことで自己を表現する場となると同時に先述したスポーツにおける啓蒙的意義を学習する場となる。チームに所属している他の選手との関わりができ、所属の欲求を満たすことができる。その中で、スポーツの持つ競争原理からお互いを高め合っていくという相互作用を期待することもできる。チームに属していることは、自分がある競技を行っていることを対外的に示すことができると同時に、自分がある競技の専門家（競技レベルは問わずに）であることを自己の中に内在化していくことが可能となる。そして、チームに属していること自体が自己の価値を高めることもある。世間一般において、強豪、伝統、名門などと

いった言葉で形容され、他者から羨望や尊敬を集めるチームが存在するが、そのようなチームの一員であることで、自分自身の価値が高いものであることを感じることもできる。

上述したようにチームに所属することで、自身の競技生活をより豊かにしていくことが可能となるが、チームに所属することで選手に要求されることも存在する。チームに忠誠を示し、目標達成に向けて娯楽や嗜好を制限し厳しい練習にのぞむというように、禁欲的になることが求められるようになるのである（Grupe, 2004）。また、サッカーなどの集団スポーツにおいては、チーム戦術が存在し、ある局面においていくつかの決まりごとが存在する。そのため、自分のやりたいプレーを選択せずに、チームのためのプレーを選択しなければならないといったように競技中もチームに忠誠を示し、禁欲的になることが求められる。また、チームに所属していることが、その選手の人格や価値を表すことと同様に、所属している選手によってそのチームのチームカラーは表されることになるため、選手たちは日常生活においても規範的な行動をすることが求められる。そのため、チームは自己を表現する場でもあるとともに、自己を抑制する場でもあり、この中で選手たちは競技スポーツにおける対人関係を学び、社会化がなされていく。

また、勝利を至上とする価値観に支配されている競技スポーツの世界におけるチームでは、選手の人格が軽視され、優れた能力を持つ選手が高い序列に位置し、能力の劣っている選手が低い序列となる。しかしながら、チームにおける序列は、競技中の重大な失敗、怪我、選手の成長、新人の加入などの様々な出来事によって変動するものであり、序列が高いからといっても、その地位は安泰ではなく満足にチーム活動を行っていける一方で、競

技スポーツの持つ競争の特性から、自分の地位が他の選手に脅かされているという不安を少なからず抱えているであろう。さらに、序列の高い選手はチーム内で高い能力を有しているのだから、「きっと〇〇が何とかしてくれる」、「〇〇にまかしておけば大丈夫」などと周囲からの期待が大きいため、大きなプレッシャーを感じていると考えられる。

序列の低い選手に関しては、能力が低く勝利への貢献には程遠く、チームにおける立場は弱い。また、良い成績を上げられないためほとんどチームに貢献できていないこと、さらには試合に出場することができないために自らの力を発揮することすらできないといった場合がある。競技スポーツでは、このような状況が選手自身に明確に示されるため、序列が低い場合は自身に価値がないと感じやすくなってしまう。

次に、競技スポーツにおけるチームは誰しもが入れるわけではなく、入ることができたとしてもチームの一員と認められるかどうかは分からず、チーム内でメンバーが淘汰されていくという側面を持っている。プロスポーツチームともなれば、入団するためには非常に高い能力が要求され、上層部に能力が低い、将来性がないと判断された選手は解雇されてしまうという非常に厳しい世界であることは広く知られていられる。また、公立高校の運動部などでは、基本的に誰でも入部が可能であるが、表面的な入部と真の意味で部の一員となることは意味が異なってくる。Lenskyj (2004) は、スポーツチームにおける新人は「新人いじめ」を経験し、その中で他者の尊厳を得ていくかチームに貢献できることを示さなければならないことを述べている。このことから、例え、運動部に入部したとしても、自分の有用性を示し他のチームメイトたちから認められなければ、本当の意味でチームの

一員となったと言うことはできない。そして、厳しい練習の中でレギュラー獲得への生存競争にさらされ、脱落してしまった選手は部から去るという選択をせざるをえない可能性もある。このため、チームに居続けられている選手たちの中には、競争の中で他者に打ち勝ってきた自信や厳しい練習を共に乗り越えてきた一体感が生まれる。しかしながら、競技スポーツにおけるチームは、「新人いじめ」などが起こるように、外部の人間やチームの一員であると周囲から見なされていない選手に対して排他的である。チームの主力となっている選手たちは、他の選手にポジションを奪われる不安を抱えながら、厳しい練習などの苦楽を共にしてきたチームの構成員たちにしか分からない共通の意識によって、内的な結合が深まっていくのである。

冒頭に示したように、筆者自身は、重大な失敗によってチームに貢献できない状態に陥ったのであるが、このことによって、他の仲間からチームの一員として見なされなくなるのではないかと不安を感じた。しかしながら、このような不安を抱えていることを他の仲間から知られることによって、チームに居られなくなるのではないかと考えてしまい、仲間たちに筆者の抱える不安を共有して欲しいとは思うことができなかった。このことは、筆者のいるチームの内的結合が弱いということの意味しているのではない。逆に、チームの内的結合が強く、チームに居続けることに魅力を感じているが故に、チームに貢献できる自分でありたい、チームに忠誠を示したいと考えるようになってしまったのである。つまり、勝利至上主義の価値観に支配されているチームの中で、選手間が内的に強く結び付いているために、このような不安を抱えることになったのである。そして、チームの中で

自己の抱える不安を表現することは、チームに対して忠誠を示すことにはつながらず、チームに対しての忠誠を示そうとすれば、自己の抱える不安をチームメイトに表現することはできないのである。

以上のことから、競技スポーツにおけるチームは、競技生活をより豊かにし、自己を表現する場といえる一方で、選手がチームに忠誠を示すことを強要し、禁欲的になるように仕向けていくという両義性を抱えている。また、苦楽を共にしてきたチームの構成員たちの内的結合を強めていく一方で、チーム内に潜む競争の原理から自分の立場を保守しようと努めるという自己矛盾性が存在する。つまり、チームは構成員間が強く結びついているにも関わらず、常に自分の立場が脅かされ、自己を表現しようとする一方で、チームに対して忠誠を示さなければならないという両義性を抱えているのである。自己表現とチームへの忠誠が矛盾していない場合、この両義性は問題とならないが、選手が何らかの問題を抱え、自己表現とチームへの忠誠の方向性に齟齬が生じた際に、チームの持つ両義性がゆえに選手を苦しめる一因となるのであろう。

チームスポーツにおける対人関係に潜む両義性

ここまで論じてきたように、スポーツおよびスポーツ活動の場であるチームは自己矛盾性・両義性を抱えている。スポーツでは、公平・公正な精神や他者との協調・協同を学ぶという啓蒙的意義を強調する一方で、勝利を至上とする価値観に囚われ、勝者・強者が正義とされるため、狡猾で卑怯な振る舞いを暗黙のうちに容認する傾向があり、敗者・弱者は蔑まれるといった自己矛盾性を抱えている。また、チームには、チームが自己を表現する場でもある一方で、自己を抑制し、チームに忠誠を示さなければならない面をもち、チー

ムの構成員同士が苦楽を共にし、内的結合が強まっていくにも関わらず、常に競争にさらされ、チームメイトを蹴落とし、蹴落とされるという両義性が存在する。そして、この両義性は競技生活が順調な場合には表面化してこないが、競技生活に問題を抱えた場合には表面化し、選手を悩み苦しませる。このような両義性が、チームスポーツにおける対人関係を複雑なものにしていると考えられる。チームスポーツを行っている選手には、その競技特性から必然的にチームメイトとの関係を持ちながら競技を行っていかなければならない。そのため、個人が失敗し、問題を抱えたとしても、そこで個人の内面に湧き上がってくる様々な感情にはチームメイトへの感情が関わっており、それがまた選手同士の関係に影響を及ぼす。筆者の事例のように、仲間に対して自分の辛さ・苦しさを打ち明けて共有して欲しいと思っている一方で、自分が使えない選手と思われぬように、悩みを抱えていないかのように振舞ってしまい、自分が抱えている問題を打破することができない。選手が問題を抱えた場合、チームスポーツの持つ両義性に振り回され、仲間に自分の弱い部分を見せてでも理解して欲しいが思いがある一方で、そのような自分の弱さを仲間に見せることが怖いという葛藤に苛まれるのである。問題を抱えた選手は、その悩みをチームメイトに打ち明けたいが打ち明けることができないという一種のダブルバインドに陥っているのであろう。

また、このような選手に接するチームメイトたちもまたスポーツの両義性をいろいろな場面で感じていると思われる。チームメイトとして、悩める選手の苦しみを共有することで、弱さを受け止めてあげたいと思う一方で、勝利に貢献できない可能性の高い選手を受け入れることができないという矛盾があるであ

ろう。このため、困難を抱えた選手が悩みを打ち明けたくとも打ち明けられないというもどかしい態度をとることで、それを見たチームメイトはその選手の困難を理解したいと思う一方で、そのような選手の悩みをあるがままに受け止めたくはないと感じ、接し方に戸惑うようになるのではないのか。そして、選手自身は、その戸惑いを感じよりもどかしい態度を取るようになり、チームメイト達はさらに戸惑うようになるという悪循環に陥ってしまうと考えられる。この悪循環には、スポーツの持つ両義性が背景に潜んでいると考えられる。つまり、チームスポーツにおける対人関係には、スポーツの持つ両義性が深く関わっており、それが対人関係を複雑なものとし、悩める選手自身の如何ともしがたい状況を生みだし、それがゆえに悩める選手自身の状況をより困難なものにしていくのである。

以上のことから、今後、困難を抱え悩み苦しんでいる選手を理解しその支援を考えていく際には、スポーツにおける両義性をどのように捉えるのが大切となってくる。具体的には、困難で苦しんでいる選手に対して、スポーツが内包している両義性を自覚させることも有用であると考えられる。なぜならば、選手自身がどうしようもない閉塞的な状況に陥っている際には自己を見失っているであろう。そのため、選手が感じる閉塞感には両義性が関わっていることを理解することによって、感情の整理につながり解決の糸口を見出すきっかけを与えることができるであろう。

引用・参考文献

- 青木邦男（2003）高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因。体育学研究，48，207-223.
- Gould, D. and Carson, S. (2008) Life skills development through sport: current status and future directions. *International Review of Sport and Exercise Psychology*, 1: 58-78.
- グルーベ・O（著）永島惇正，越川茂樹，岡出美則，市場俊之，滝沢文雄，有賀郁敏（訳）（2004）スポーツと人間：文化的・教育的・倫理的側面。世界思想社：京都。 <Grupe, O. (2000) Vom Sinn des Sports : kulturelle, padagogische und ethische Aspekte. Hoffmann und Campe Verlag GmbH; Hamburg.>
- 早川武彦（1995）近代スポーツ批判：その研究史概観。研究年報，3-16.
- 久保正秋（2009）意味生成としての「スポーツ運動」体験の意義。体育学研究，54，183-196.
- Lenskyj, H. (2004) What's Sex Got to Do with it? Analysing The Sex +Violence Agenda in Sport Hazing Practices. Johnson, J. and Holman M. (Ed.) Making the team: Inside the World of Sport Initiations and Hazing. Canadian Scholars' Press Inc; Toronto, 83-96.
- 洪倉崇行・杉山佳生・西田 保（2011）ニュージーランドの保健体育カリキュラムとライフスキル教育：日本におけるライフスキル教育の推進に向けて。人間生活学研究，2，59-69.